

令和6年度全国学力・学習状況調査に係る 結果の概要と指導のポイント

登別市教育委員会

【I 調査の概要】

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査実施日

令和6年4月18日（木）

3 調査対象

小学校第6学年（309名参加）、中学校第3学年（231名参加）

4 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語科、算数科・数学科）
- (2) 生活習慣や学習環境等に関する質問調査（児童生徒に対する調査・学校に対する調査）

5 その他

本調査は、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面です。

【Ⅱ-1 調査結果表（令和6年度）】

1 平均正答率（％）の比較表【登別市、全道、全国】

(1) 小学校第6学年（309名）

国 語		登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
	合計得点	67.0	67.0 (±0.0)	67.7 (-0.7)
評価の観点	知識及び技能	69.9	69.0 (+0.9)	69.8 (+0.1)
	思考力、判断力、表現力等	65.7	65.1 (+0.6)	66.0 (-0.3)
思考力、判断力、表現力等	話すこと・聞くこと	61.1	58.3 (+2.8)	59.8 (+1.3)
	書くこと	66.5	67.4 (-0.9)	68.4 (-1.9)
	読むこと	69.8	70.4 (-0.6)	70.7 (-0.9)

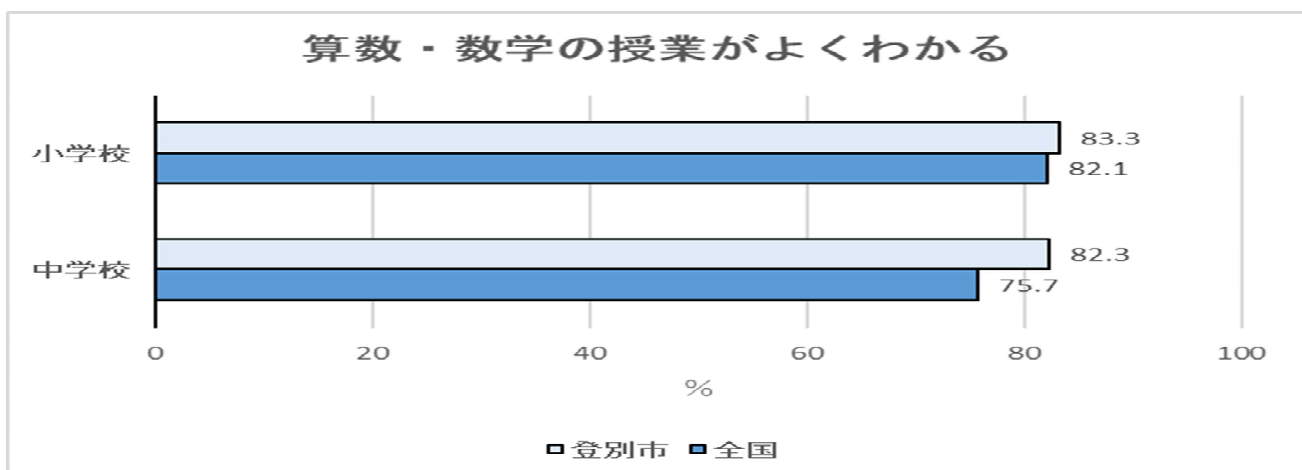
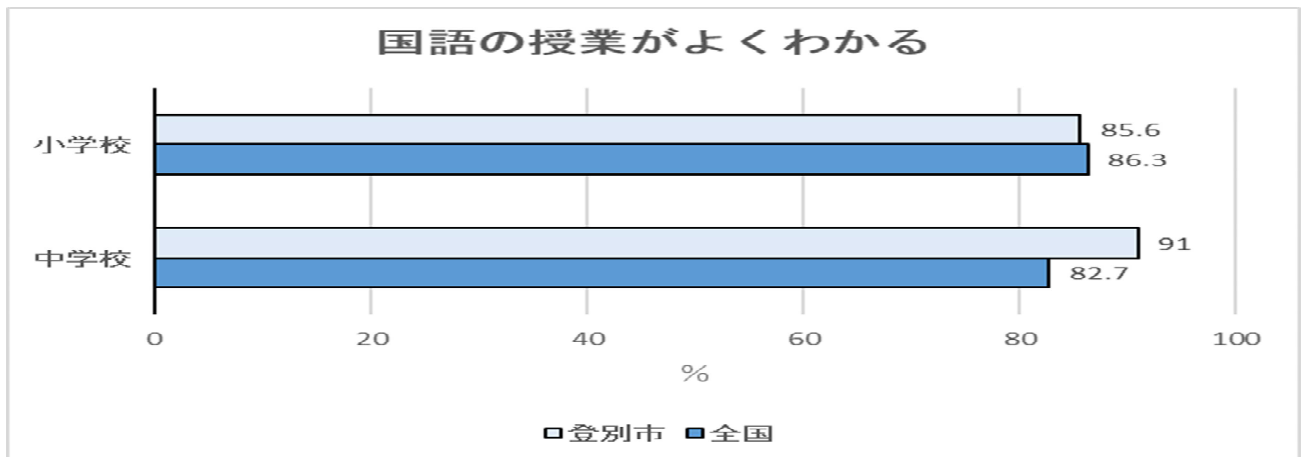
算 数		登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
	合計得点	58.0	61.0 (-3.0)	63.4 (-5.4)
評価の観点	知識及び技能	69.1	69.6 (-0.5)	72.8 (-3.7)
	思考力、判断力、表現力等	43.5	49.0 (-5.5)	51.4 (-7.9)
学習指導要領の領域	数と計算	63.1	62.5 (+0.6)	66.0 (-2.9)
	図形	57.8	64.7 (-6.9)	66.3 (-8.5)
	変化と関係	45.8	47.8 (-2.0)	51.7 (-5.9)
	データの活用	56.2	59.7 (-3.5)	61.8 (-5.6)

(2) 中学校第3学年（231名）

国 語		登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
	合計得点	54.0	58.0 (-4.0)	58.1 (-4.1)
評価の観点	知識及び技能	58.1	61.6 (-3.5)	62.0 (-3.9)
	思考力、判断力、表現力等	51.4	54.9 (-3.5)	55.4 (-4.0)
思考力、判断力、表現力等	話すこと・聞くこと	53.0	58.5 (-5.5)	58.8 (-5.8)
	書くこと	61.7	64.0 (-3.3)	65.3 (-3.6)
	読むこと	45.1	47.6 (-2.5)	47.9 (-2.8)

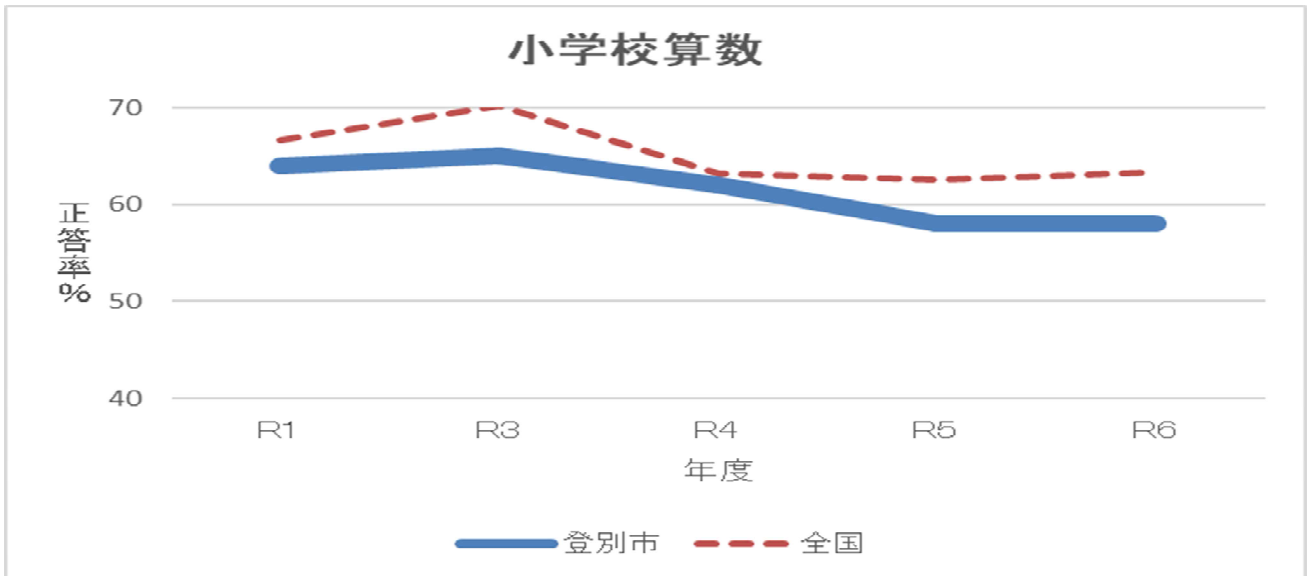
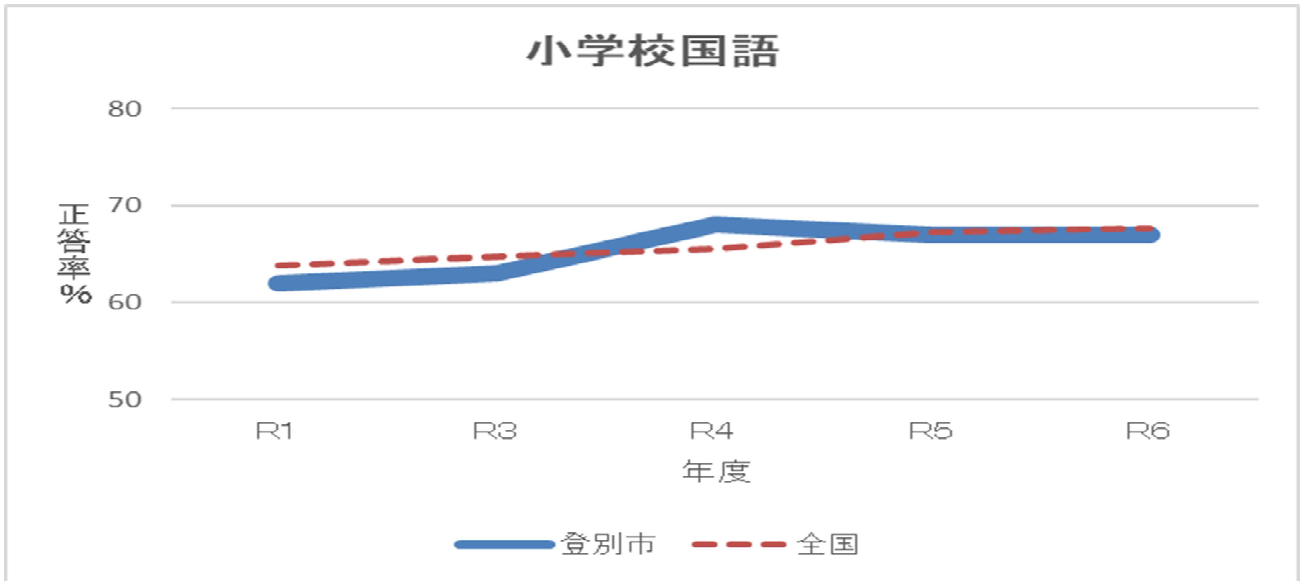
数 学		登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
	合計得点	46.0	51.0 (－5.0)	52.5 (－6.5)
評価の 観点	知識及び技能	57.9	61.6 (－3.7)	63.1 (－5.2)
	思考力、判断力、表現力等	21.0	27.8 (－6.8)	29.3 (－8.3)
学習指 導要領 の領域	数と式	41.4	48.4 (－7.0)	51.1 (－9.7)
	図形	31.5	39.3 (－7.8)	40.3 (－8.8)
	関数	56.2	59.7 (－3.5)	60.7 (－4.5)
	データの活用	53.9	54.5 (－0.6)	55.5 (－1.6)

2 普段の授業についての肯定的な回答（児童・生徒質問調査より）

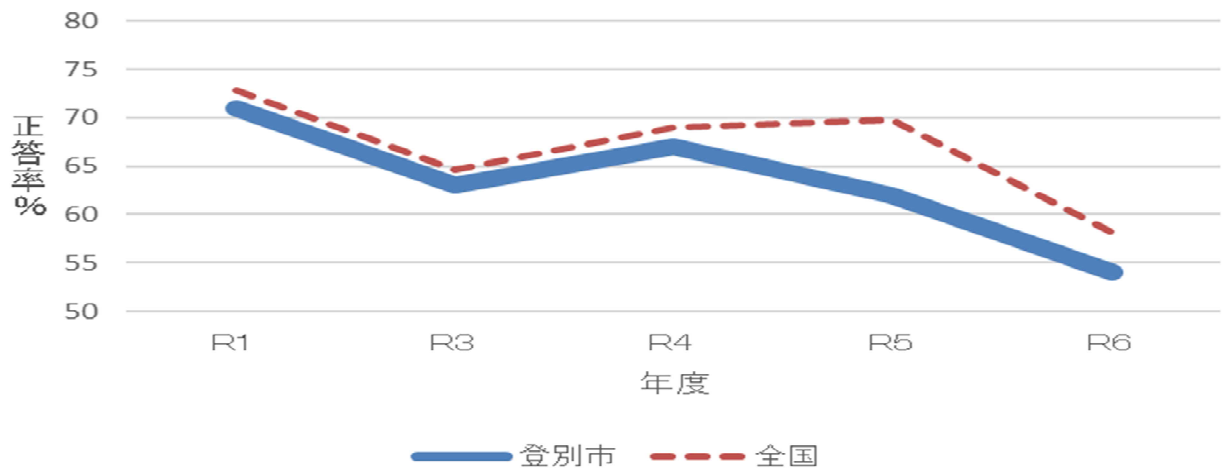


【Ⅱ-2 調査結果（令和元年度～令和6年度）】

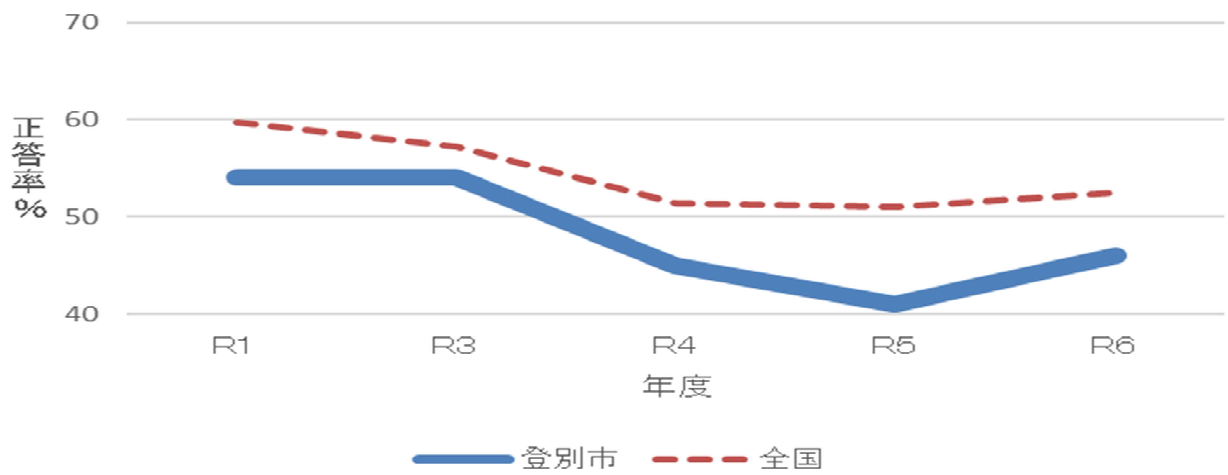
2 平均正答率（％）の経年変化比較グラフ（登別市・全国）



中学校国語



中学校数学



【Ⅱ-3 各教科の結果】

※全国平均（ポイント数）との比較表現

～ - 2	- 2 ～ - 1	- 1 ～ + 1	+ 1 ～ + 2	+ 2 ～
▲下回る	△やや下回る	=同等	○やや上回る	◎上回る

1 小学校国語

(1) 評価の観点

①知識及び技能（＝）

「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、全国平均と同等であるが、「話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと」では、全国平均をやや上回っている。

「情報の扱い方に関する事項」は、全国平均と同等である。

「我が国の言語文化に関する事項」は、やや下回っている。

②思考力、判断力、表現力等（＝）

全国平均と同等である。詳細は以下「(2) 思考力、判断力、表現力等」のとおり。

(2) 思考力、判断力、表現力等

①話すこと・聞くこと（○）

全国平均をやや上回っているが、中でも「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること」は、全国平均を上回っている。

②書くこと（△）

全国平均をやや下回っているが、「目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり、関係づけたりして、伝えたいことを明確にすること」は、全国平均をやや上回っている。

③読むこと（＝）

全国平均と同等である。

2 小学校算数

(1) 評価の観点

①知識及び技能（▲）

全国平均を下回っている。詳細は以下「(2) 学習指導要領の領域」のとおり。

②思考力、判断力、表現力等（▲）

全国平均を下回っている。詳細は以下「(2) 学習指導要領の領域」のとおり。

(2) 学習指導要領の領域

①数と式（▲）

全国平均を下回っているが、「問題場面の数量の関係を捉え、式に表すこと」と「除数が小数である場合の除法の計算をすること」は、全国平均と同等である。

②図形（▲）

全国平均を下回っている。

③変化と関係（▲）

全国平均を下回っている。

④データの活用（▲）

全国平均を下回っている。

3 中学校国語

(1) 評価の観点

①知識及び技能（▲）

「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、全国平均を下回っているが、「文脈に即して漢字を正しく書くこと」は、全国平均と同等である。

「情報の扱い方に関する事項」では、全国平均を下回っているが、「意見と根拠など情報と情報の関係についての理解すること」は、全国平均と同等である。

「我が国の言語文化に関する事項」では、全国平均を下回っている。

②思考力、判断力、表現力等（▲）

全国平均を下回っている。詳細は以下「(2) 思考力、判断力、表現力等」のとおり。

(2) 思考力、判断力、表現力等

①話すこと・聞くこと（▲）

全国平均を下回っているが、「必要に応じて質問しながら話の内容を捉えること」は、全国平均と同等である。

②書くこと（▲）

全国平均を下回っているが、「目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること」は、全国平均をやや上回っている。

③読むこと（▲）

全国平均を下回っているが、「文章と図を結びつけ、その関係を踏まえて内容を解釈すること」は、全国平均と同等である。

4 中学校数学

(1) 評価の観点

①知識及び技能（▲）

全国平均を下回っている。詳細は以下「(2) 学習指導要領の領域」のとおり。

②思考力、判断力、表現力等（▲）

全国平均を下回っている。詳細は以下「(2) 学習指導要領の領域」のとおり。

(2) 学習指導要領の領域

①数と式（▲）

全国平均を下回っている。

②図形（▲）

全国平均を下回っている。

③関数（▲）

全国平均を下回っているが、「2つのグラフにおける y 軸との交点について、事象

に即して解釈すること」は、全国平均と同等である。

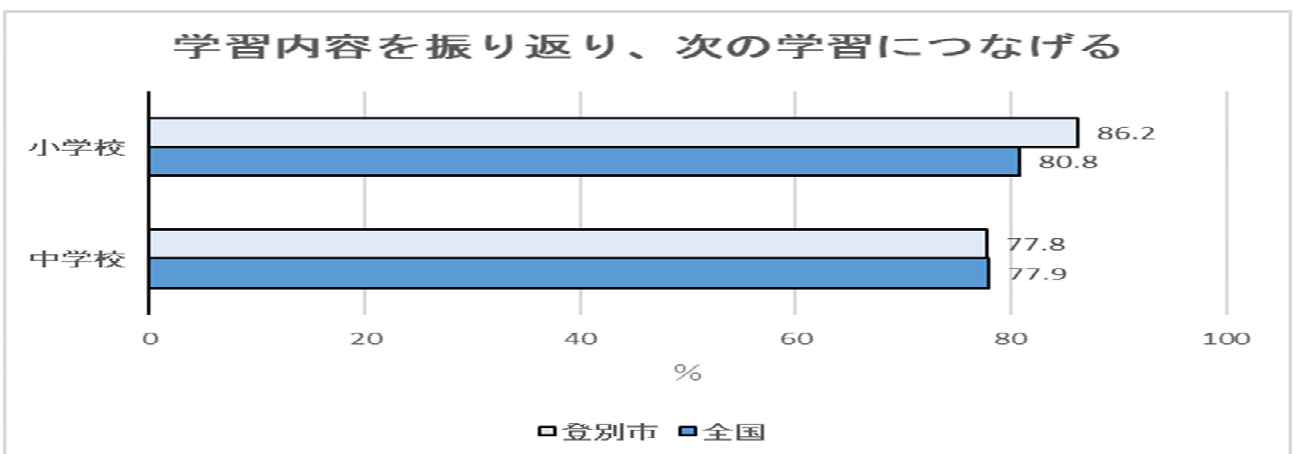
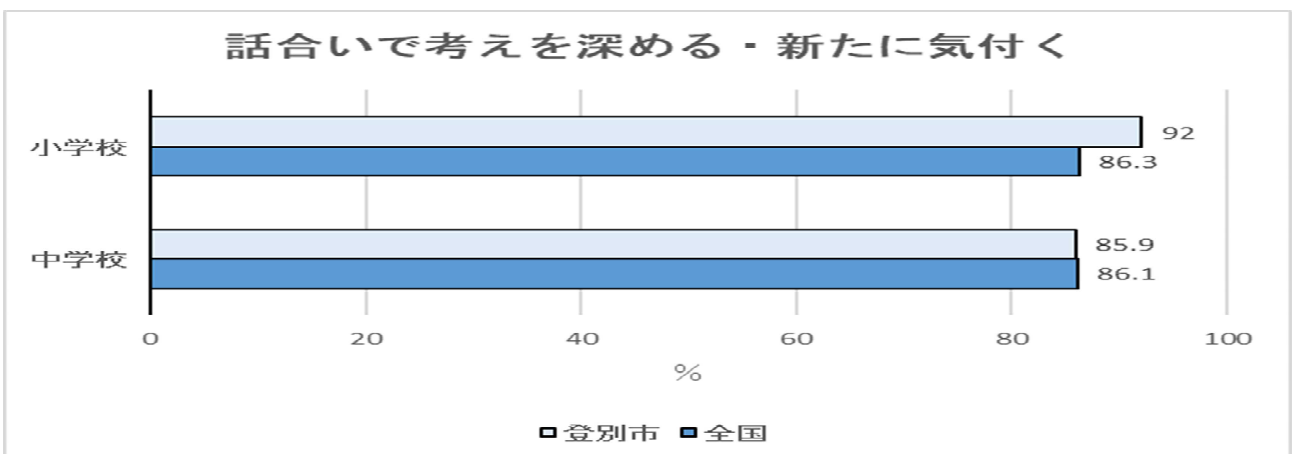
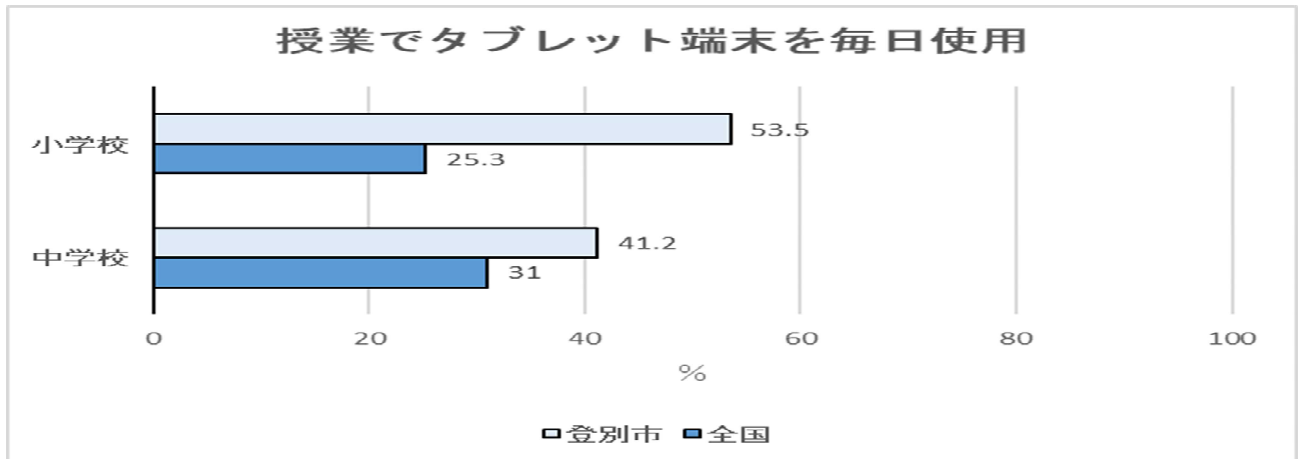
④データの活用（△）

全国平均をやや下回っているが、「簡単な場合について、確率を求めること」は全国平均を上回っている。また、「複数の集団のデータの分布から、四分位範囲を比較すること」は、全国平均と同等である。

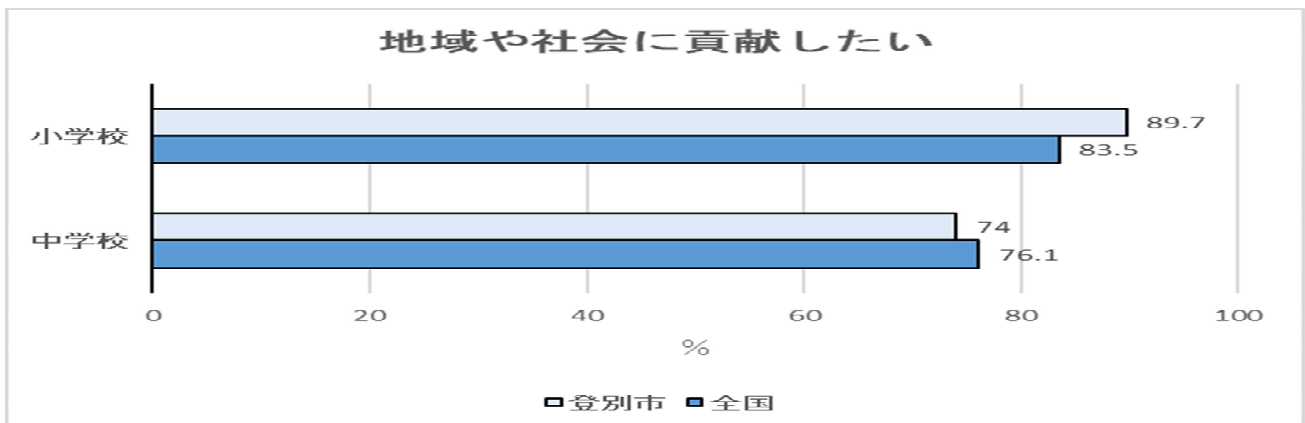
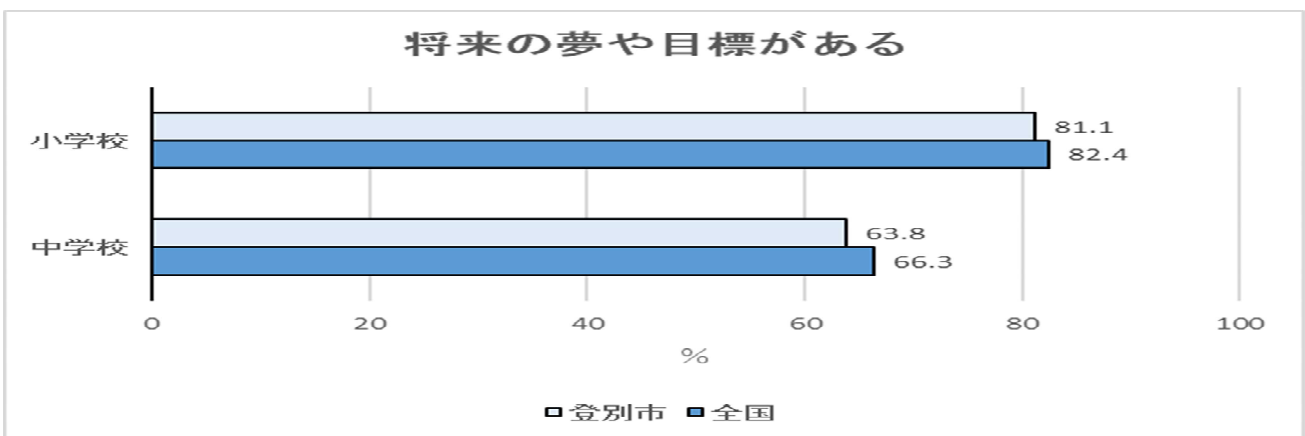
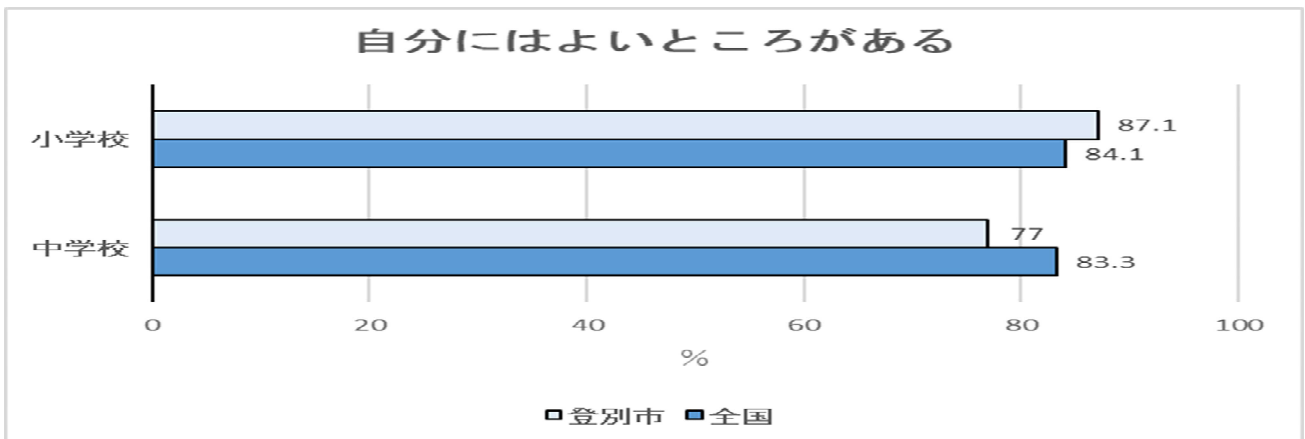
【Ⅱ-4 児童生徒質問紙調査結果概要】

令和6年度教育行政執行方針に関する項目を抽出しています。

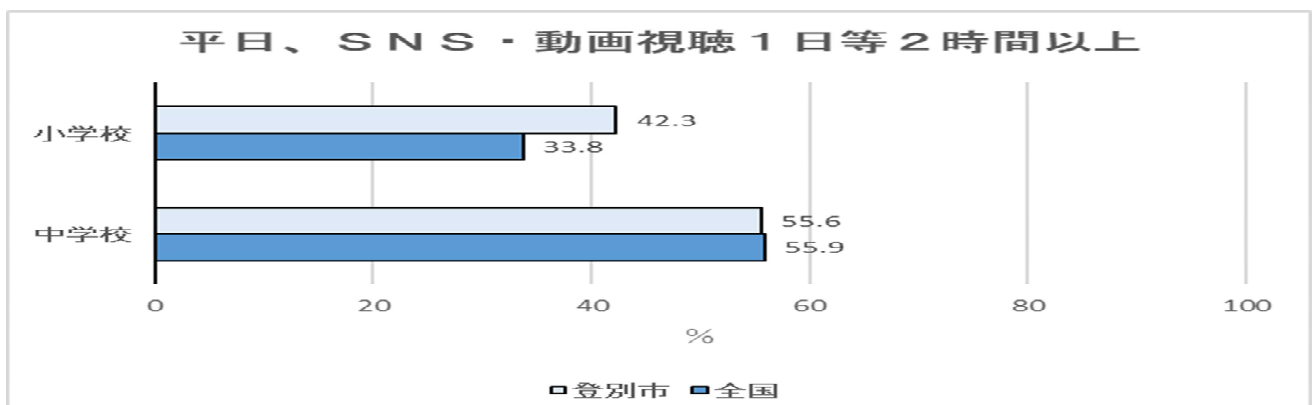
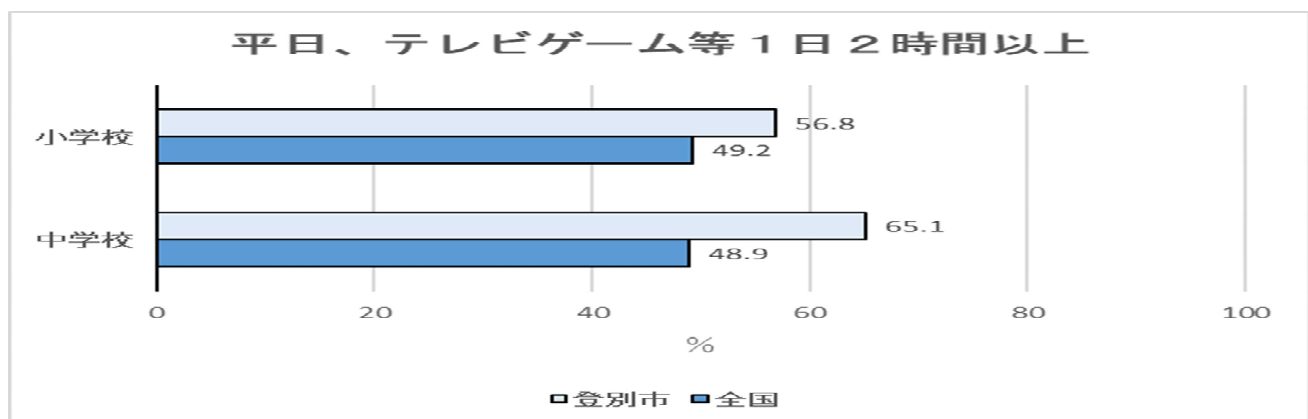
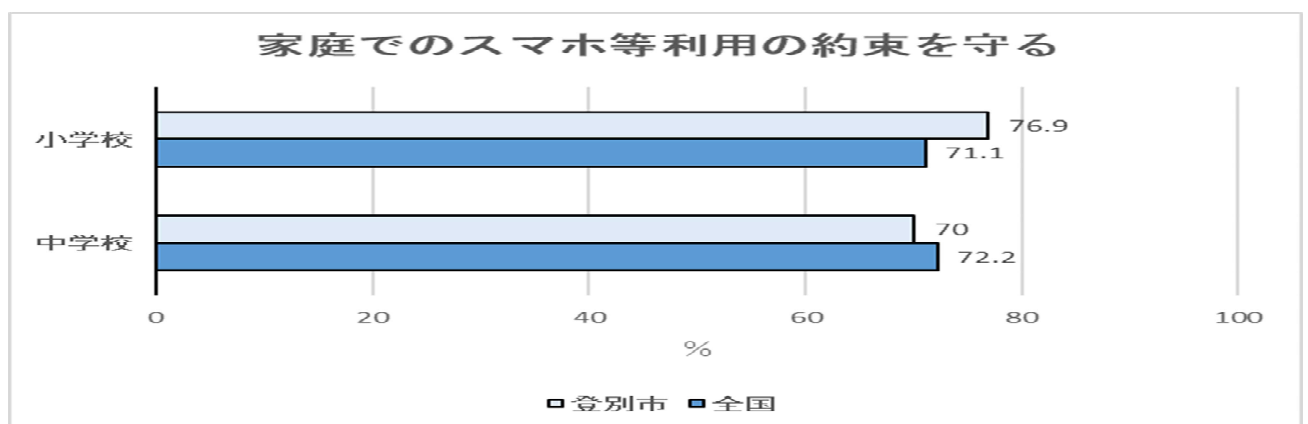
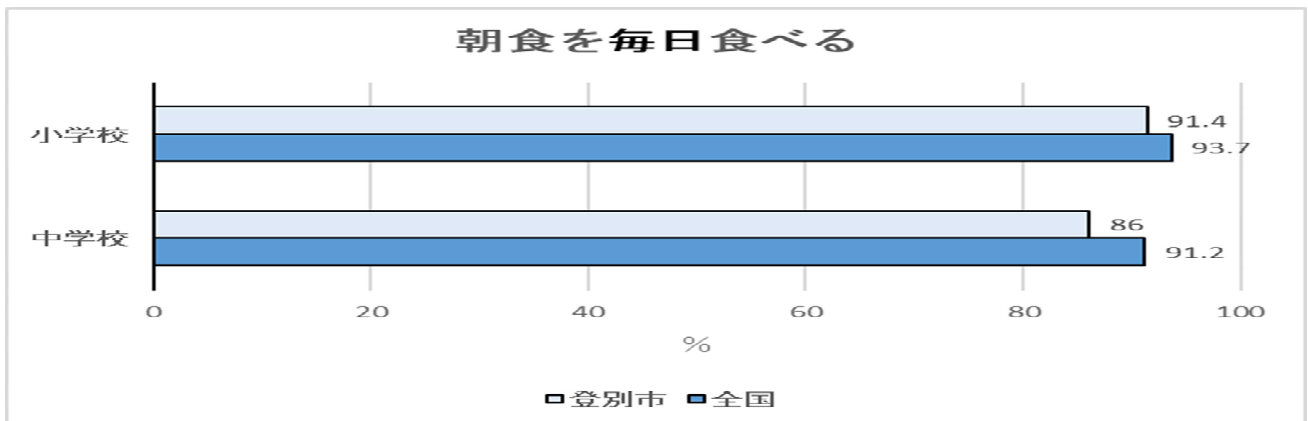
【確かな学力】



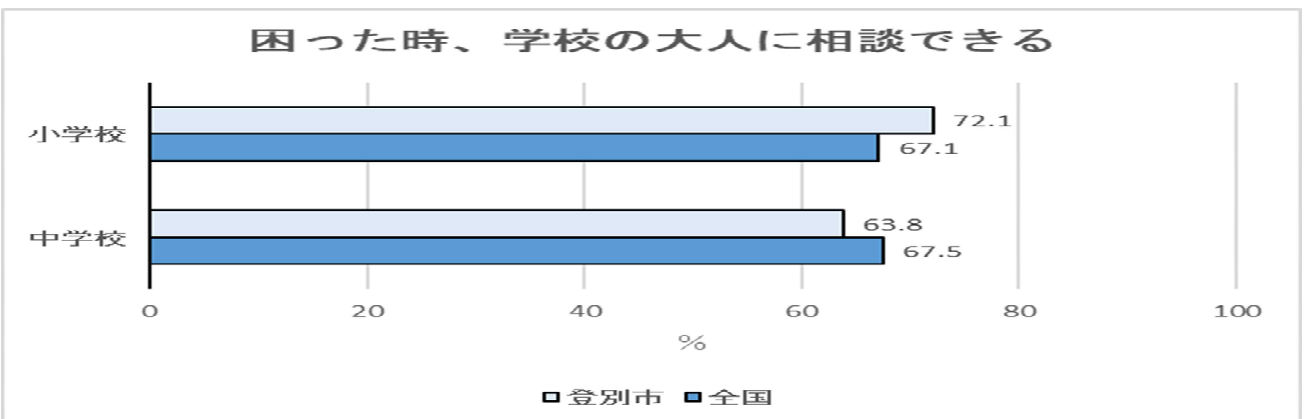
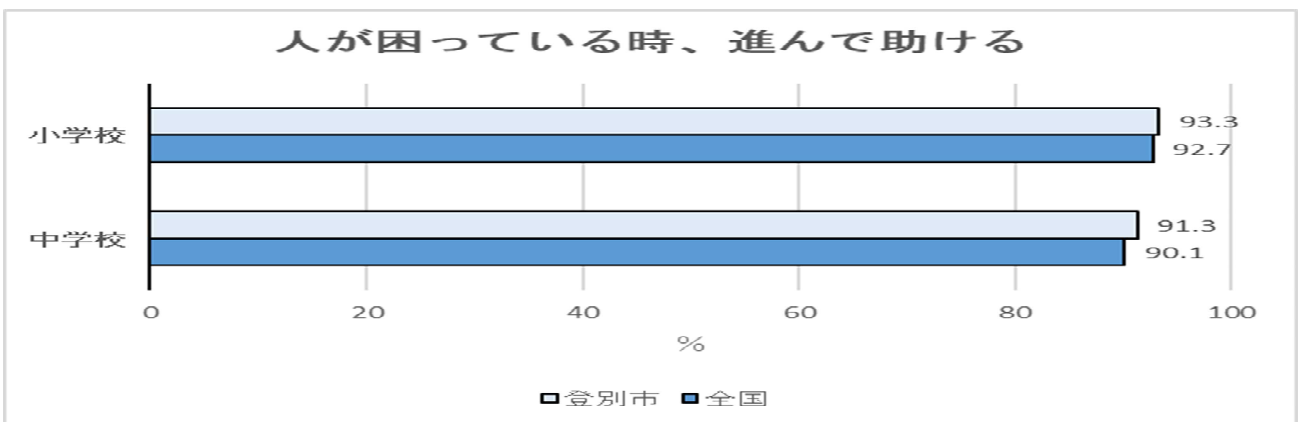
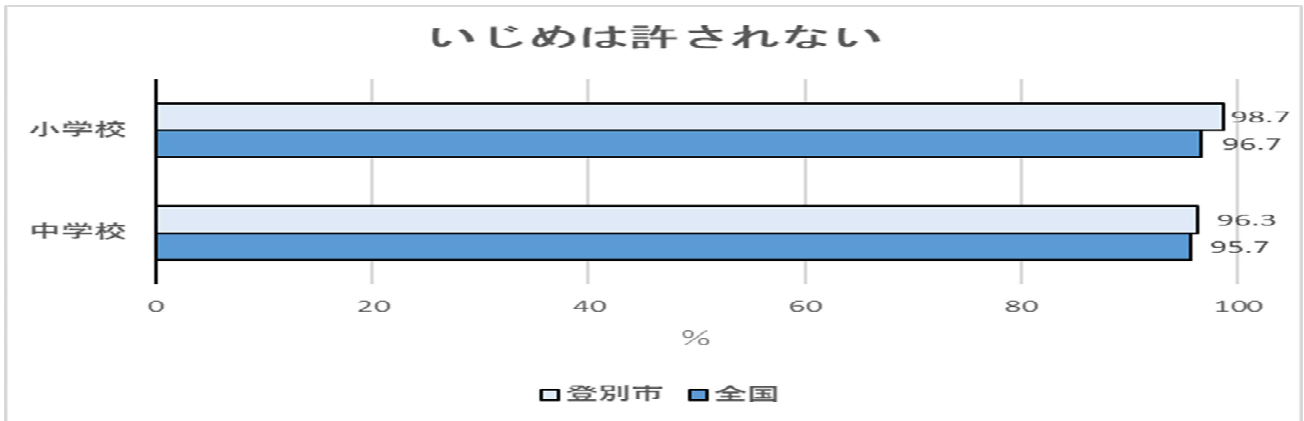
【豊かな人間性】



【健康・体力づくり】



【いじめ・不登校対策】



【Ⅲ 調査結果を踏まえた分析と指導のポイント】

1 小学国語

(1) 分析

- 「話すこと・聞くこと」の平均正答率が全国平均をやや上回り、「知識及び技能」と「読むこと」が全国平均と同等であることから、日常の授業で、学習内容定着のための取組が効果的に行われていることが伺える。
- 「書くこと」の平均正答率が全国平均よりやや下回っていることから、目的や意図に応じて、事実と感想、意見を区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書く学習活動が不足していることが伺える。
- 「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の平均正答率にそれほど差がないことから、バランスよく指導していることが伺える。

(2) 学校における指導のポイント

- 「書くこと」に係る学習内容の定着を図るため、タブレット端末の共同編集機能を活用し、作成した文章を比較したり、推敲し合ったりすることで、自分の考えが伝わるように書く機会を多く設定した授業をする。また、国語に限らず、他の教科や行事等でも同様に取り組むことが大切である。
- 「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」がバランスよく指導されていることから、引き続き学習した内容が定着する授業や家庭学習が行われることが大切である。

2 小学算数

(1) 分析

- 「知識及び技能」（計算力等）について、全国平均正答率（72.8%）を下回っているものの、本市の平均正答率は約7割（69.1%）程度解答できており、一定の学習内容の定着が伺えることから、反復練習や定着のための取組が効果的に行われていることが伺える。
- 計算問題等を解く「知識及び技能」（69.1%）の定着状況と文章問題等を解く「思考力、判断力、表現力等」（43.5%）の差が大きいことから、「知識及び技能」を活用して「思考力、判断力、表現力等」を身に付ける学習活動が不足していることが伺える。
- 他の領域と比べ、「図形」の領域で、全国平均正答率との差（-8.5ポイント）が特に大きいことから、図形を構成する要素やそれらの位置関係に着目し、図形のつくりや性質についての理解や体積を求める立式を苦手としていることが伺える。
- 児童質問調査で、「算数の授業がよくわかる」という質問に対し、肯定的に回答をした児童の割合が全国平均を上回っているが、算数の平均正答率は全国平均を下回っていることから、授業の目標や課題設定が適切なのか、学習内容を定着させる学習活動が十分なのかなど、各校が分析し、課題を克服する必要がある。

(2) 学校における指導のポイント

- 「知識及び技能」の定着のため、「個別最適な学び」の視点から、タブレット端末を効果的に活用し、個々に応じた学習レベルの問題に取り組んだり、反復練習をしたりするなど、1人ひとりの学習状況を丁寧に把握し個別対応をするとともに、子どもが自ら学ぶ学習を大切にしたい授業をする。
- 「正しく計算できる」、「公式を覚える」などの結果ばかりを重視するのではなく、問題解決までの過程を重視し、「なぜそのように考えたのか」という思考過程を話し合うことを大切にしたい授業をする。また、考えを交流する場面では、自分と他の児童の考えを比較したり、考えを深めたりするため、タブレット端末の共同編集機能を積極的に活用することが有効である。
- 実際に図をかいたり、立体を組み立てたりする活動や、タブレット端末で立体を操作しながらイメージをもたせる作業を多く取り入れた授業をする。例えば、立体図形の面と面、辺と辺などの位置関係に着目しながら、展開図で表したり、逆に、展開図から立体を構成したりすることができるようにする。また、図形の体積を求めたり、図形の性質について考察したりすることに重点をおいた授業をする。

3 中学国語

(1) 分析

- 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」とも全体的に全国平均を下回っているが、問題別の解答状況から、全国平均と同等な正答率の問題がいくつかみられることから、学校が重点を置いて指導した内容について学習内容が定着していることが伺える。
- 「知識及び技能」(58.1%)の定着状況と「思考力、判断力、表現力等」(51.4%)の定着状況に差がある。このことから、例えば、「序論」「本論」「結論」などの文章構成の「知識及び技能」を活用して、その構成を使って文章を書く「思考力、判断力、表現力等」を育成する学習活動が不足していることが伺える。
- 生徒質問紙調査で、「国語の授業がよくわかる」という質問に対し、肯定的に回答をした生徒の割合が全国平均を上回っているが、国語の平均正答率は全国平均を下回っていることから、授業の目標や課題設定が適切なのか、学習内容を定着させる学習活動が十分なのかなど、各校が分析し、課題を克服する必要がある。

(2) 学校における指導のポイント

- 学習指導要領の目標や内容と単元の目標の整合性を図り、「何ができるようになるのか」(育成を目指す資質・能力)を重視した指導計画を立てる。
- 「学んだ文章構成を活用して、自分の考えが伝わるように文章を工夫して書く、説明する学習活動をする。」など、身に付けた「知識及び・技能」を活用して、「思考力、判断力、表現力等」を高める授業をする。また、国語に限らず、他教科や特別活動、行事でも同様に取り組む。
- タブレット端末の共同編集機能を使い、生徒同士で考えを説明し合う、文章を推敲

し合うなどの活動を大切にし、「思考力、判断力、表現力等」を高める授業づくりをする。

4 中学数学

(1) 分析

- 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」とも全体的に全国平均を下回っているが、問題別の解答状況から、平均正答率が全国を上回る、又は同等である問題がいくつかみられることから、重点を置いて指導した内容について学習内容が定着していることが伺える。
- 他の領域と比べ、「数と式」の領域で、全国の平均正答率との差（-9.7ポイント）、「図形」の領域で、全国の平均正答率との差（-8.8ポイント）と、特に大きいことから、数量関係を正しく捉えたり、筋道を立てて図形の関係を証明し、考察することを苦手としている生徒が多いことが伺える。
- 半数以上の問題で本市の無回答率が全国平均より低いことから、中学生が粘り強く問題を解こうという意欲が伺える。
- 生徒質問調査で、「数学の授業がよくわかる」という質問に対し、肯定的に回答をした生徒の割合が全国平均を上回っているが、数学の平均正答率は全国平均を下回っていることから、授業の目標や課題設定が適切なのか、学習内容を定着させる学習活動が十分なのかなど、各校が分析し、課題を克服する必要がある。

(2) 学校における指導のポイント

- 学習指導要領の目標や内容と単元の目標の整合性を図り、「何ができるようになるのか」（育成を目指す資質・能力）を重視した指導計画を立てる。また、日々の授業で、学習内容の定着状況をタブレット端末で丁寧に把握し、「わかる」だけでなく、繰り返し問題を解き、「できる」ようにする。
- 生徒が最後まであきらめずに解答する意識を引き続き維持・向上する働きかけをする。
- 正しく問題を解く結果ばかりを重視するのではなく、問題解決までの過程も重視し、「なぜそのように考えたのか」という思考過程を話し合うことを大切に「思考力、判断力、表現力等」を高める授業をする。
- 「数と式」の平均正答率が特に低いことから、計算力等を高めるため、タブレット端末を使い、個々の学習内容の定着状況を的確に把握し、1人ひとりに応じた課題に取り組みせるなど、「知識及び技能」が確実に定着する指導をする。また、日常的にタブレット端末を持ち帰り、家庭学習で積極的に活用する。
- 「図形」の平均正答率が特に低いことから、図形の性質を考察する場面では、予想した事柄が成り立つことを理論的に考察し表現することや、問題解決の課程や結果を振り返って新たな性質を見いだすなど、じっくりと考え、互いの考えを交流しながら、確実に理解し考え方を説明できるようになる授業をする。また、考えを交流する際には、タブレット端末を効果的に活用する。

【Ⅳ 児童生徒質問紙調査結果を踏まえた分析】

1 確かな学力について

- 「授業でタブレット端末を毎日活用する」という質問に対し、肯定的に回答をした児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、学校での活用が進んでいることが伺える。本市では、児童生徒がタブレット端末を使う場面や使い方を主体的に選択し、活用することを目指していることから、「個別最適な学び」と「協動的な学び」の一体的な充実に向けて、さらなる活用を進めていく必要がある。
- 「話し合いで考えを深める・新たに気付く」、「学習内容を振り返り、次の学習につなげる」という質問に対し、肯定的に回答をした児童の割合は全国平均を上回り、生徒の割合は全国平均と同等であることから、意欲をもち、自分なりに計画を立て、見通しをもちながら学習していることが伺える。
- 「授業がよくわかる」という質問に対し、肯定的に回答をした割合が全国平均を上回る、又は同等であるが、小学国語・小学算数・中学数学の平均正答率は全国平均を下回っているため、学校での授業の目標設定や家庭での学習内容や時間は適切なのかなど、授業と家庭学習の在り方や授業と家庭学習の連携について、各学校で十分議論する必要がある。

2 豊かな人間性について

- 「自分にはよいところがある」という質問に対し、肯定的に回答をした生徒の割合が全国平均を下回っている。また、「将来の夢や希望がある」という質問に対し、肯定的に回答をした児童生徒の割合が全国平均を下回っている。このことから、児童生徒の意見を尊重し、よりよい人間関係を築きながら、自己存在感や自己有用感を育む取組を進める必要がある。
- 「地域や社会に貢献したい」という質問に対し、肯定的な回答した生徒の割合が全国平均を下回っていることから、社会人としての自立した人間を育てる観点から、本市の産業や文化の理解を深め、家庭や地域の人たちと連携したキャリア教育を推進することが大切である。

3 健康・体力づくりについて

- 「朝食を毎日食べる」という質問に対し、肯定的に回答をした児童生徒の割合が全国平均を下回っていることから、「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣が身に付くよう、児童生徒や保護者に繰り返し啓発するとともに、保護者が生活リズムの定着に向けたしつけを徹底できるよう情報提供する必要がある。
- 「家庭でのスマホ等利用の約束を守る」という質問に対し、肯定的に回答をした生徒の割合が全国平均を下回っていることから、家庭でのルールを守る意義やその必要性を家庭内で話し合い、保護者が責任をもってルールを理解させるよう働きかける必要がある。
- 「平日、テレビゲーム等の利用時間」を問う質問に対し、「1日2時間以上」と回答

した児童生徒の割合が全国平均を上回り、「SNSや動画視聴時間」を問う質問に対し、「1日2時間以上」と回答した児童の割合が全国平均を上回っていることから、身体への影響や情報モラルの徹底、学力や生活リズムへの影響などについて、より一層啓発していく必要がある。

4 いじめ・不登校対策について

- 「いじめは許されない」、「人が困っている時、進んで助ける」という質問に対し、肯定的に回答をした児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、規範意識の高さが伺える。「鬼っ子フォーラム」など、「みんなが通いたくなる学校づくり」の取組を引き続き推進し、互いの違いを認め合い尊重し合う豊かな心の育成や規範意識の維持・向上を図っていくことが大切である。
- 「困った時、学校の大人に相談できる」という質問に対し、肯定的に回答をした児童の割合は全国平均より高いが、生徒の割合は全国平均より低い。教職員と生徒の信頼関係が学校教育の土台であるため、日ごろからよりよい人間関係を構築し、生徒の気持ちに寄り添った関わりや指導が大切である。また、昨年度、小学4年生を対象としたとした「SOSの出し方に関する教育」を、今年度は全児童生徒を対象として進めることで、いつでも先生に相談してもよいという意識を高めていく必要がある。